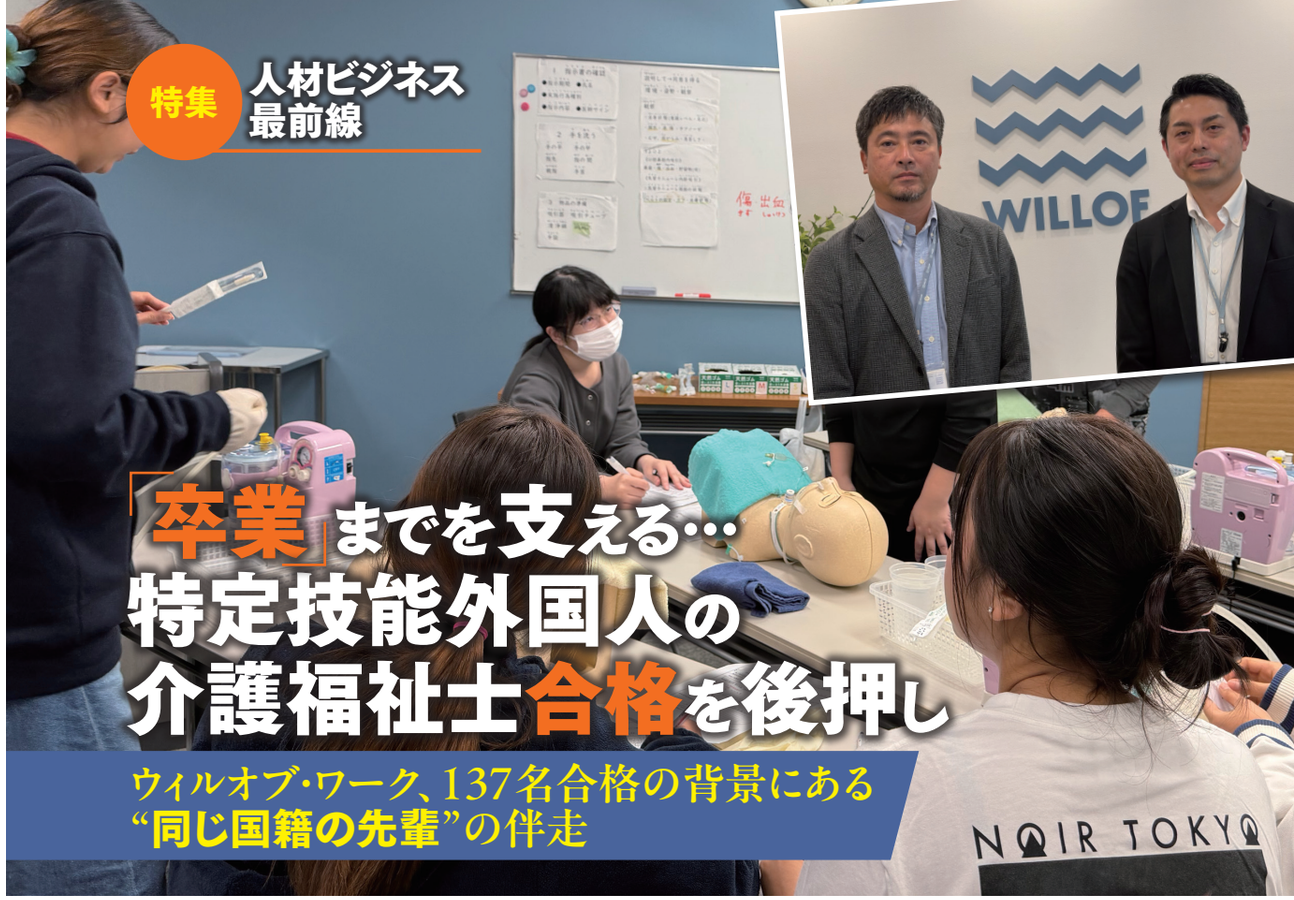

「卒業」までを支える…特定技能外国人の介護福祉士合格を後押し

ウィルオブ・ワーク、137名合格の背景にある“同じ国籍の先輩”の伴走

２０４０年度には約57万人の介護職員を確保する必要があると推計されるなか、介護現場では外国人介護人材の長期定着が大きな課題となっている。ウィルオブ・ワーク（東京都新宿区、村上秀夫代表取締役社長）が登録支援機関として支援する特定技能外国人のうち、２０２６年１月の第38回介護福祉士国家試験では２９２名が受験し、１３７名が合格した。合格率は46・９％と、厚生労働省が公表した特定技能１号外国人受験者の合格率（33・０％）を大きく上回る。本誌は11月12日、同社ライフケア事業部外国人雇用支援営業部の平沢望部長と、医療・介護・保育の人材事業全体を統括する角陽輔ライフケア事業部長を取材した。高い合格率の背景と、合格を「支援の終わり」ではなく次の事業につなげていく同社の考え方を追った。

「後がない」受験者と、増える一発合格

合格率の高さの理由を尋ねると、平沢部長はまず「特別な教育プログラムの成果というわけではありません」と率直に語った。同社が外国人向けの日本語教育や介護福祉士のオンライン講座を本格的に始めたのは今年に入ってからで、今回の合格者の多くはそうした授業を受けていないという。

平沢部長が合格者の傾向を分析するなかで最も大きな要因と見るのが、受験者の置かれた状況だ。在留資格「特定技能」の在留期間は原則として通算５年。今回の試験に合格しなければ帰国を迫られるため、後がない受験者が少なくなかった。「そうした方々の頑張りが、合格率を底上げしたと見ています」。

加えて、受験を重ねる人が増えていることも背景にある。介護福祉士国家試験の合格率は全体で70・１％だが、厚生労働省が公表する特定技能１号外国人受験者の合格率は33・０％にとどまり、外国人が一度で合格するのは容易ではない。近年は特定技能で来日して３年の実務経験を積み、受験資格を得る人が増えている。２回目の受験、技能実習生として来日して３回目の受験という人も出てきた。受験を重ねる間に日本語の読解力が高まることも、合格を後押ししている。

ただ、取材の場で同社が改めて集計したところ、別の側面も見えてきた。１３７名の合格者のうち２回以上受験した人は約60名で、残る77名、つまり合格者の半数以上が初めての受験で合格していたのだ。平沢部長は「一度で合格する人の数が、前年よりかなり増えました」と語る。後がない受験者の底力に加え、日々の支援が初回受験者の合格にも結びつき始めている様子がうかがえる。

同じ国籍の〝先輩〟が伴走する

その日々の支援を担うのが、外国籍のキャリアアドバイザー（ＣＡ）だ。角事業部長によると、平沢部長が率いる外国人雇用支援営業部には、営業部隊とは別に、インドネシア、ミャンマー、ベトナム、ネパール出身のＣＡが20名弱在籍している。いずれも正社員として営業担当とユニットを組み、特定技能人材の募集にあたる母集団形成と、就労後の定着・活躍に向けたフォローアップの両方を受け持つ。



ＣＡは定期面談に加え、日常的にチャットツールを使って支援対象者と密に連絡を取る。「職場で困っていることはないか」「日本語能力試験（ＪＬＰＴ）には申し込んだか」「勉強はどのくらい進んでいるか」。こうした声かけを重ね、「このままいけば次はＮ３に合格できる」「国家試験に向けて、何月までに実務者研修を受けておく必要がある」といった見通しも一人ひとりに伝えていく。同社は実務者研修の申込数をＣＡの評価指標（ＫＰＩ）にも組み込んでおり、組織として介護福祉士合格を支える仕組みを整えている。

もっとも、ＣＡは受験講師ではない。来日して介護の仕事に就いた経験を持つ人もいるが、介護の知識や経験のない人も多い。共通するのは、日本語能力がＮ１かそれに近い水準にあることと、支援対象者と同じ20代から30代という世代の近さだ。ＣＡは受け入れ企業からのフィードバックを伝えたり、特定技能の５年を終えた先にどのようなキャリアがあるかを示したりと、同じ国籍の先輩として後輩をコーチングする役割を担う。時には厳しいことも伝える一方、日本人の営業担当からは伝えにくいことを汲み取り、本人に届く言葉に置き換えてくれる存在でもあるという。

支援対象者の国籍構成にも同社ならではの事情がある。今回の合格者はベトナム87名、ミャンマー42名、インドネシア６名、中国１名、韓国１名で、ミャンマーの比率が比較的高い。ウィルグループはかつてミャンマー・ヤンゴンに現地子会社を置き、日本語教育事業を手がけていた。現地での募集・教育から入国後の活躍支援までをグループ内で一貫して担う構想だったが、政変を受けて撤退を判断した。それでも、当時グループ社員として現地の学校で教育責任者を務めた人物が、現在も外部パートナーとして教育や母集団形成に携わっており、その縁が今に

